

新宿区

UD

まちづくり
ニュースレター

Vol.

13

SUMMER

第13号
2024.06

UDスポット
とりつめいじこうえん
都立明治公園

「スパイラルアップ」という言葉を知っていますか。多様な関係者が議論しながら、常に新しい解決策の検討を行い、実際に反映するという流れを繰り返し続けることで、常に前の段階よりも良い状態をつくっていくという考え方です。今回紹介する「都立明治公園」では、実際にこの考え方を取り入れた公園づくりを目指しています。2023年10月に東京都初の「ローネーション」を活用した公園としてオープンしたこの場所は、豊かな自然の中でのんびりとくつろぐ人、イベントに参加する人、遊具で遊ぶ人、ショッピングや飲食を楽しむ人でにぎわっています。多様性を大切にし、よりよい場所にするための工夫を重ねる都立明治公園とは、いったいどんな施設なのでしょうか。一緒に探ってみましょう。

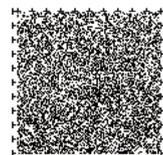
ユニバーサルデザイン

UDとは？

年齢・性別・国籍・個人の能力等にかかわらず、できるだけ多くの人々が利用できるよう生活環境その他の環境をつくり上げていく考え方です。

新宿区には、多くの外国人をはじめ、様々な人々が生活しています。区では、移動しやすく、利用しやすく、わかりやすいまちを目指して、令和2年3月にUDまちづくり条例を制定しました。

このニュースレターでは、新宿区の実践や、UDスポットの紹介、利用者の声などをお伝えしていきます。



Uni-Voice

渋谷川の水景を
イメージ

UD探検隊が行く！新宿UDまちづくりスポット

Good
UD
ポイント

様々な楽しみ方ができる3つの広場

多世代の交流の場となる「希望の広場」、子どもも安心して遊ぶことができる「インクルーシブ広場」、ゆったりと座って花々と水景を楽しむ「みち広場」など、自分に合った場所を見つけて過ごすことができます。

多様なイベントにも耐えられる、
耐圧仕様の天然芝

利用者コメント

天気の良い日はよく利用しています。解放感があって心地よく、過ごしやすいです。今後は子どもをはじめとした多様な人が楽しめるイベントが開催されることを期待しています。
(40代・男性)



インクルーシブ広場の
周囲は緩やかに
傾斜しており、
滑って遊んだり
座ったりできる

インクルーシブ広場

Good
UD
ポイント

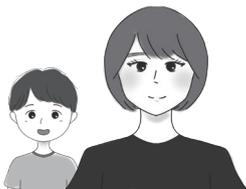
柔軟な対応ができる可動式の遊具

全て可動式のインクルーシブ遊具であるため、老朽化したときやニーズが変化したときなど、時代の流れに合わせて変えていくことができます。

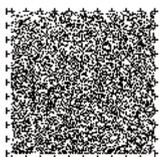
利用者コメント

ウォーキングの会の下見で訪れました。トイレが使いやすく、座れる場所や緑の多い、とても癒される空間です。木々が成長し、暑い日でも快適に過ごせるようになる数年後を楽しみにしています。
(70代・女性・4人組)

利用者コメント



家が近いので毎日利用しています。子どもが安心して遊べる場所のほか、犬が散歩できる場所やペットOKのカフェがあり、子どもやペットにも優しい公園だと感じています。
(20代・女性・親子2人組)



Uni-Voice



必要に応じて臨機応変に表示内容
を変更できるデジタルサイネージ

Good
UD
ポイント

多様な人に配慮された設備

オールジェンダートイレや多機能トイレ、点字付きの案内板や多言語対応可能なデジタルサイネージの案内図など、多様な人が快適に利用できる工夫が各所に施されています。

オールジェンダートイレの
ピクトグラム



車いす使用者
対応トイレの
ピクトグラム



公園内のインクルーシブルルート
を点字と凹凸で表した案内板

周囲との境界が無くアクセスしやすい出入口

公園に複数ある出入口は、隣接する敷地と自然につながり、周りの施設や道路からアクセスしやすくなっています。高低差のある公園内は、車いすでも移動できるゆるやかな傾斜の道でつながっています。

隣接する敷地と自然につながる出入口



100年後の杜を目指して
成長中の木々

誇りの杜



誇りの杜の中を回遊できる
ゆるやかな傾斜の道



写真提供：Tokyo Legacy Parks 株式会社



利用者コメント

以前からこの場所を知っており、テレビ番組で「誇りの杜」の木を植えているところを観ていました。都立明治公園になってから初めて来ましたが、緑が多く、見晴らしがよくて良い所だと思います。
(60代・男性)



杜の中を散策できる
通路がある！

運営者インタビュー

都立明治公園は、2023年10月に、Park-PFI(※1)を取り入れた初の都立公園として開園しました。より多くの人に公園で遊具で遊ぶ以外のことも楽しんでもらえるよう、カフェやアウトドアショップ、スパなど様々な民間施設を導入しており、場所や時間ごとに日々多様な人々が訪れるパブリック空間となっています。

都立明治公園では、公園によって都市をシームレスにつなぎたいという思いの下、隣の敷地と公園が自然につながるように整備しています。そのため、この公園に訪れた際には「いつのまにか公園に入っていて、いつのまにかまちに戻っていた」という感覚になります。また、「みち広場」では、通常は境界として柵や植え込みを設置する場所に、水景やガーデンを設けることで、にぎわいや憩いの場になるよう整備しました。さらに、公園内にある8.5mの高低差の解消については、自然に、誰もが利用でき、そしてまちの回遊性につながるよう、「誇りの杜」の中を大きくうねらせた緩やかなスロープでつなぎ、出入口を複数箇所設ける等の工夫を施しました。

近年、固定式のインクルーシブ遊具をよく見かけるようになりましたが、私達は「インクルーシブ」の重要なポイントは「時代の流れに柔軟に対応できるもの」であると考えています。そのため、「インクルーシブ広場」の遊具は全て可動式となっており、広場の用途に合わせた取り外しや、利用者のニーズに沿った新たな遊具との入れ替え等、柔軟な対応をすることが可能です。

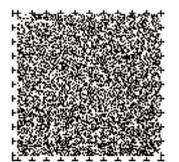
また、公園内には5本のスマートポール（人流計測システム）が設置されており、常に利用者の属性や人数等の情報収集を行っています。今後は収集したデータを基に公園の運営について改善を行っていきます。

この公園は施設が完成して終わりではありません。これからが公園としての始まりであり、利用者の声にどれだけ対応できるかが大切だと考えています。私たちはPark-PFIで企画から維持管理まで一つのチームで行っているからこそ、様々な事柄への柔軟な対応が可能です。今後も「この公園はまたここが変わったぞ」と思ってもらえるよう、「スパイラルアップ」の考え方の下、改善を重ねてより多くの人にとって利用しやすい公園づくりを進めていきます。

東京建物株式会社
新規事業開発部
黒田さん、松村さん



日本工営都市空間株式会社
都市整備部
吉成さん



Uni-Voice

※1 飲食店、売店等の公園利用者の利便を向上させる施設の設置と、そこから生じる収益を活用して公園利用者が利用できる公園施設の整備・改修等を行う者を公募で選定する「公募設置管理制度」のこと。



歴史から学ぶ「バリアフリーデザイン」という言葉の始まりは？



日本女子大学 建築デザイン学部
建築デザイン学科 助教
(一級建築士・福祉住環境
コーディネーター 1級)
植田瑞昌さん

「ユニバーサルデザイン」や「バリアフリーデザイン」、近年では新たに「インクルーシブデザイン」という言葉を耳にするようになりました。

令和4年内閣府の調査⁽¹⁾では、「バリアフリー」という言葉の認知度は96・4%、同様に「ユニバーサルデザイン」という言葉の認知度は60・6%でした。

さて、多くの人に知られるようになった「バリアフリー」という言葉は、いったい、いつどのようになされたのでしょうか。

今から65年以上前、国連欧州会議にて「建築的障壁 (Architectural Barriers) が障害者の行動を大きく阻害している」という共通認識がなされました。時間同じくして、アメリカ基準協会内に当事者団体を含むチームを発足し、研究が始められたといわれています。その中心人物がイリノイ大学リハビリテーション教育研究所長の Timothy J. Nugent 教授です。

その研究をまとめて1961年に発表されたのが「American Standard Specifications for Making Buildings and Facilities Accessible to, and Usable by, the Physically Handicapped (ASA)」(身体障害者が建物や施設を利用しやすくするための米国標準仕様書) になります(写真1)。そこには、車椅子使用者が利用できる「スロープの勾配」や「出入り口の幅」等の基準が記載してあり、これらの基準は、世界各国に大きな影響を与えました。

その後、1974年に国連障害者生活環境専門家会議が各国の10年間の取り組みをとりまとめ、刊行したパンフレットのタイトルが「Barrier Free Design (バリアフリー

デザイン) です。日本では1990年ころからようやく法制度が整い「バリアフリーデザイン」という言葉が広がっていきました。

現在では、「バリアフリーデザイン」とは物理面だけでなく、社会的、制度的、心理的、情報面での障壁などを取り払い、さまざまな障害者や高齢者、子ども連れや妊婦等が不便なく生活することができるようにするという考え方として周知されています。

長い歴史の中で「バリアフリーデザイン」は「ユニバーサルデザイン」へと受け継がれていきますが、元々は、ひとりひとりがふつうの暮らしをしたいという願い(ノーマライゼーションの理念)が根幹にあり、そのために必要な環境の整備は私たち一人一人がつくり、繋げていくものです。新宿区 UD まちづくりニュースレター Vol. 6 (2022)でお伝えしたように、「障害」は個人の課題とするのではなく、「環境」によってもたら

されることがあることを忘れないでほしいと思います。私たちが住むまちが、誰もが共に住みやすいまちになるようにできることから始めましょう。

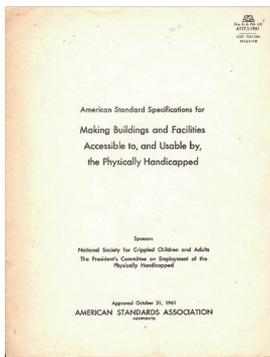


写真1 身体障害者が建物や施設を利用しやすくするための米国標準仕様書 (ASA)

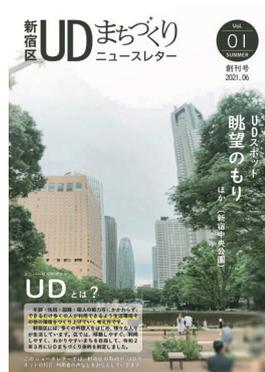
参考文献：野村敬「バリアフリーの足跡」日本生活支援工学会誌 Vol. 3 No. 2, 2004
(1) 内閣府「令和4年度バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する意識調査報告書」2023

(今回のコラムは UD に詳しい専門家の方からご寄稿いただきました。)

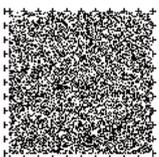
ニュースレターの「バックナンバー」を是非ご覧ください！

これまでの UD まちづくりニュースレター (創刊号～第12号) は、新宿区の HP から PDF ファイルで閲覧できます。新宿区内の公園や広場などの紹介のほか、UD についてのコラムも掲載しています。

新宿区の HP はこちら→



新宿区からのお知らせ



Uni-Voice

新宿区ユニバーサルデザインまちづくりニュースレター 第13号 (令和6年6月発行)

お問い合わせ先：新宿区景観・まちづくり課

取材・編集：(株) 菫まちづくり研究所